

さ ざ ん か

第63号、2007年1月

あけましておめでとうございます。みなさま、よい年末年始をお過ごしだったことと思います。元号が平成に変わってもう19年目ということになりますね。21世紀になってからは7年目。この間に、ソビエト社会主義共和国連邦は崩壊し(えっ、そんな国ってあったの?)、共産主義国家である中国はこれまでの資本主義国よりももっと凄まじく市場経済を実践しているように見え、9.11 テロ以降、強引にイラクに侵入した米国は最新兵器を駆使する戦争に勝って、フセインを絞首刑にしたものの、いまだにイスラムの砂漠の国で無為に若者を死なせてあえいでいます。

わがニッポンはこの間に何が変わったのでしょうか。文字通り泡のようにバブル経済がはじけたあと、全体に暗い雰囲気が多いようですね。バブルから立ち直ったとは言うものの、実態は企業栄えて社員は貧乏。ビルの耐震検査など含めて、何でもかんでも民営化(カンカラミン、カンカラミンの大合唱)のつけ。意欲ある優秀な学生が公務員になるのを敬遠するほどの、公務員バッシングの凄まじさ(こんなぼろくそ言われるなら民間で高い給料を貰ったほうがいいや)。

漢字やニッポンの歴史を教える前に、小学生に英語を教えるアホらしさ。(英語は将来のお金儲けのために教えるらしい。国際的なビジネスマンを養成するためとか、グローバル社会で国際的に活躍するためとか言ってますね。)英語をしゃべる恥知らずの人間よりも、英語を知らないけど立派な人生を送っている日本人を数知れずみてきましたけどね。

頑張っても報われない一般の人々やワーキングプアの若者達。一方で、うまく立ち回り儲かる賢い人々。(多額の報酬のほかに年金まで貰いながらなおかつ仲間内への投資で1千万円以上儲かった中央銀行総裁がその代表?)。

まあしかしそうはいうものの、ここはひとつ庶民のしぶとさを示さなければならないでしょう。今年も、どうせお金儲けはできませんが、お金には換えられない健康(あるいは元気)と心のふれあいを大切にして、希望を持って頑張っていきましょう。

..... 病院からのお知らせ

- * 骨密度を測定してみませんか。骨年齢が分かります。骨粗しょう症の進行を予防できることがあります。
- * 脳MRI 検査をしてみませんか。認知症の予防につながる可能性があります。

==== 新春のごあいさつ ==== さざんか編集局長 高橋 浩一

みなさま明けましておめでとうございます。今年もよろしく願いいたします。年頭に当たり、ひとことご挨拶申し上げます。明るい話題ではないのですが、身近なことです。で、われわれを取り巻く厳しい医療情勢について少し考えてみたいと思います。

ここ数年、患者さんは負担増で苦しみ、病院側は診療報酬のマイナス改定や、厳しい医療安全対策の実施（安全対策に対する経費はすべて病院が出す）などで苦しんでおり、医療の主演であるはずの患者と医療者がどちらもつらい立場にあるという、奇妙な状況となっております。（厚生労働省の官僚の人たちや政治家が辛いかどうかは知りません。たぶん辛くないのでは）。

健康あっての人生であります。あるいは健康ではなくても、いのちあっての人生であります。その健康や、いのちに値段をつけようという風潮には本当に嫌気がさします。少なくともいのちは平等だと思います。ただ、100歳のいのちと10歳のいのちも平等ではありませんが、どちらかひとつ選ぶという究極の選択があるとすれば、問題なく10歳のいのちを選んでも非難は受けないでしょう。かれはあと90年間生きる機会があるのですから。選択のない、間雲な“いのち大切”主義は、もう十分老衰し尊厳死を選ぶ権利がある老人に対して、それを許さず、人工呼吸器を装着したり、高価な薬剤を投与したりしています。

高価な薬剤は医療費を押し上げ、一方、人工呼吸器の事故があればそこに居たナースが厳しく責任を問われ、病院は賠償金を支払うように裁判所から命令されます。かといって、人工呼吸器を装着しないと、場合によっては延命の機会を奪ったといつて、これまた医療者側が裁判で負けることもあります。若い人のカラダと異なり、老衰間際のカラダは、ちょっとしたことで破綻しますが、それでも想定外であれば医療訴訟のもとになります。

患者さんの権利向上はとても良いことだと思いますが、それを家族の権利と勘違いしてかどうか、医療訴訟を起こす人が増えてきました。患者さんは医者や病院に感謝しているのに、その家族が訴えることも多いようです。医療者側の謝罪だけでは誠意はつたわらないのでしょうか。誠意の証として（？）、数千万円のお金でその損害賠償を要求する人もいます。医者は医者で、訴訟を受けるくらいなら、はじめから関わるのはよそうとして、面倒であったり、重症の患者さんは敬遠するような傾向になってきました。夜を徹して治療しても、結果が悪ければ、訴えられるというのではたまりません、と彼らは言います。

お金がないと十分な医療を受けられなくなりつつあります。外国で心臓移植をするには何千万円とか何億円かの寄付を集めないといのちは救ってもらえません（命の選別）。保険

が効かない高度な医療は自由診療にしようとしています。お金持ちしか受けることができない医療ということになりそうです。お金を出せば治療できるのに、法律でそれを制限するのは逆差別であるとお金持ちは叫んでいます。

保険証一枚で安心して平等な医療を受けることができるのが、わが国の世界に類を見ない良い特徴だったのですが、グローバル化するためにはそんな甘いことではだめだといえます。民間の保険に入らないと医療費は支払えませんよとばかりに、外国の保険会社の広告の多いことにはびっくりします。民間保険が必要ではないような、しっかりした国民皆保険制度であってほしいものです。

とにかくわれわれを取り巻く医療情勢は厳しいものがあります。でも、いつまでもそのことばかりを歎いていても仕方ありません。歎いても歎かなくても時は過ぎていきます。お金のことは大切ですし病院経営がなりたないと、十分な医療が出来ません。(最新の医療機器の購入など)。それでも、われわれはお金とは一線を引いて、慈愛に満ちた医療をし、患者さんや仲間と協調しながら、さらに前進していきたいと思っております。医療者と患者さんとはまさに一期一会の関係。今年も職員一同、皆様と共に頑張りたいと思います。どうぞ、よろしく願いいたします。

ゴンドラの唄 吉井勇

いのち短し 恋せよ乙女
紅き唇 あせぬ間に
熱き血潮の 冷えぬ間に
明日の月日は ないものを

いのち短し 恋せよ乙女
黒髪の色 あせぬ間に
心のほのお 消えぬ間に
今日はふたたび 来ぬものを

県立北薩病院の理念

慈愛・協調・前進

孫

西屋敷喜美子

私たち夫婦には子供が居ない。だが孫？は。沢山居る。甥や姪たちの子供だ。みんなかわいい子供たちで、高校生から赤ちゃんまで大勢居る。特に同じ市内に住んでいる甥の子供2人がかわいい盛りで、5才の男の子（Sちゃん）、3才の女の子（Uちゃん）で、たまにパパ、ママと4人で遊びに来る。

甥は二十年ほど前に母親を病気で亡くし、父親は五年ほど前から入院生活を余儀なくされている。孫たちも実の祖父母を知らない。私たち夫婦を実の祖父母と思い、「おじいちゃん」「おばあちゃん」と言って慕ってくれる。私たちも嬉しくて、かわいくて畳が傷もうが、縁側で走ろうが、一向に腹が立たない。「Uちゃん」がおじいちゃんの膝の上に「ちょこん」と乗れば、夫も嬉しそうに相好をくずしっぱなしである。

今年の正月は「Sちゃん」の七草だった。我が家へ来て、甥が写真を何枚も撮る。孫たちとの楽しい写真を沢山届けてくれ、また敬老の日には、私たちの似顔絵を書いてプレゼントしてくれた。本当に嬉しいものだ。ある日、夫の妹の家に親子4人で遊びに行き、「Sちゃん」が「早くおじいちゃんちに行こう」と言って、駄々をこねたらしい。それを聞いて、妹に悪いような気がして仕方がなかった。

孫たちも実の祖父母を知らないだけに、私たちが実の孫だと思い広い心で受け入れてやりたい気持ちでいっぱいである。これから、幼稚園、小学校、中学、高校と成長して行くであろう孫たちが現在の素直な心を持ち続けて生きて行ってもらいたいと切に願っている。私たちも健康で長生きして孫たちの成長を見届けたいと思う今日この頃である。

「おじいちゃん」膝を取り合ふ 冬日和

「おばあちゃん」面映きこと 冬の午後

短歌

宮園辰夫

音もなく降り来し雨のあたたかさ 長き日照の終わらんとして

長旅を終えて使者は荒崎に 今は一万を越える友来たり

==== カッコ良い亭主になれ

宮園辰夫

40代後半の奥さん達のグループと話をする、皆口をそろえて、近頃の中高年の男性で心がときめくような魅力的な男性は少ない。人間の中身はもとより、健康で、体型も若々しく、かっこよく、年を取っても女が近寄って行けるような人であってほしい。くたびれた顔をして、家に居ても、できない、やらしてもサマにならない。緊張感があって、かっこいい中高年は・・・そうだな・・・どこに行けば居るかな？天文館、いや、東京かな。

でも成田か羽田に行くとなんだか会へそう。定年になって、やる事がなくなると男はみじめなくらい役に立たない。夜になると尚、役に立たない。一杯の晩酌が終わるとすぐ寝る。それから女は楽しみにしているのに。駄目だこりゃ。その点、女はいくら年を取っても、あれこれする仕事はいっぱいある。役に立つ仕事ばかり。男の年寄りが公園で孫のお守りをしているのをみても、なんか板につかない。スーパー等に買い物に行っても、籠をぶらぶら下げて、うろうろしているだけで、みられたもんじゃない。

そこに行くとも中高年でも、元気な男の人はスーパーに行ってもサマになる。コンビニエンスストアなんかに入っても、買い物等スマートにかっこよく買い物をしている。若々しくないジジーは、レジに来てから10円玉か1円玉を落として、他の買い物客が並んで待っているのに、人の足先を必死になって探したり、迷惑をかけても、平気できょとんとしている。だからそんな姿は女にとってとてもたまらない。だから中高年でもボサーツとしていると女は離婚してしまう。かっこ悪い亭主は女房の方が見限って暖簾にする。

世の中の男性よ、頑張れ。人生の最後は夫婦二人きりだから、みじめでかっこ悪くならないように、お互いに努力し、若いうちから趣味を持ち、工夫して、人生を楽しむことがこれからの年寄りの課題かもしれない。若いうちは、先生であったり社長であったりした人が、案外先はわからない。何でも出来ないでポーっとしていたら、亭主なんてそっちのけで、外の男か女同士で旅行や温泉に行くかも知れない。世の男よ、元気を出して奥さんに捨てられないように頑張ろう。かっこ悪い亭主は捨てられるぞ。

==== さつま狂句

==== キンカン

いかなこて倒産はすいめ孫が会社

美人美人ち顔にや合わん厳し女房

因果な商売

平城エミ

人は生きてきたようにしか死ねないとも言う。施設の夕食が終わって、そろそろお休みケアに入ろうとする時間になると、Aさんは決まって詰め所にやってくる。「今夜の当直は誰ですか。ガスの元栓はしめましたか。そろそろ廊下の電灯を消しなさい」看護婦の一人が答える。「はい今夜の当直は私です。良く見回ります。でも電灯だけは未だ動いている患者さんも居られますので、今暫くつけさせてください」「頼みましたよ」其れが日課であるAさんは、昔、さる民間病院で婦長さんだったという。

Bさんは県内の名のある病院の病棟婦長さんであった。五体の動きは殆んど基本的日常生活に支障のない状態なので、病棟内をこまめに動かれる。「〇〇さんの顔が赤いよ、検温しなさい」「モーニングケアは終わったの」「早く清拭を始めなさい」等々である。そこで看護婦達は三階の総婦長さんのご指示ですと笑いあいながら仕事をすすめる。

思えば看護婦など因果な商売ではある。看護婦を志望するのは、大抵何らかの志望を触発される理由を以って進学する機会が多いから、学卒以来特異な世界で長年生きることになる。身に染み付いた職業の軌道は、リタイアした時になっても、容易に修正できるものではなく、習い性となってしまった先輩方に接すると、つい自分の来るべき姿を思い描いてしまう。

そんな悠長な時が過ぎて、今その様な事態が何時自分に降り懸かるかもしれない危うい年齢に達した。再び思う。看護婦とは因果な仕事に魅せられたものだ。

編集後記

暖冬、なのでしょうね。もちろん、暖冬とは呼べないとても寒い日もあるのですが、全体としては暖冬だと思えます。振り返ること二十年前の大口市は朝、出勤前に、凍りついた車の窓をやカンのお湯で溶かすのが日課でした。最近は、毎日ということはありません。

自然も人も移ろいゆくものだからこそ、「いま、ここに」ということを大事にしたいと思えます。今年もみなさまと共に歩むさざんかでありたいと願っております。

発行所：県立北薩病院さざんか編集局

発行責任者：高橋 浩一